

アジサシの海

秋吉 好
え・貝原 六一

真夏の太陽が河口の海に燐々と照りつけていた。アジサシの群が鎌のように鋭い白い翼を煌めかせて飛んでいる。海は細波立ちキラキラと輝いてる。アジサシは燕に似た尾羽をびんと張り素早い翼動で風を受けて遊弋する。アジサシの姿が白い波間に隠れてしまう。キイツ、キイツ、と鋭く啼いて、アジサシが海に飛び込んでいく。水音が立ち、白い水繁吹きがあがる。アジサシが獲物をくわえて舞い上がる。

河口の海は製鉄所と埋立地の間にひろがっている。波止めのテトラポットが幾重にも沈められ鎖のように縁を隣る。埋立地の堤防の下で若い男女が釣をしている。

若者はテトラポットの先に出て竿を大きく振り上げて海に糸を投げ入れる。シャツを脱いで裸になつた若者の身体に力がみなぎり、そして一瞬しなやかに弾んだ。筋肉のよく締つた逞しい身体が溢れるばかりに陽光をはじいた。少女は廊のよう大きくなり返つて陰になつた堤防の側壁にもたれ、編物をしながら、若者の動作を見守つている。クーラーとボットと赤いバケツがならび、若者の脱いだ緑色のTシャツがきちんとたたんである。

対岸の製鉄所は眠つた巨大な象のように鎮つてゐる。ときどき白い蒸気の固まりが空に昇つて行つた。船が沖を音もなく航行する。空には雲もなかつた。赤いクーベが軽やかな爆音をたてながら堤防に沿つた。

コンクリート道を走つてきた。赤いクーベは堤防の行き止まりに駐車している旧式の白い軽四輪の後ろにブレーキを軋ませてとまつた。

清美が車から下り立つた。つば広の白い帽子の下の黒い髪が風になびく。サングラスをはずして眩しそうに空を見上げた顔は、切れ長の目をした整った顔立ちで、黒水晶の小さな耳飾りがよく似合う。肌は抜けるように白かった。それが白いコスチュームと解け合つて、足の指先の紫色のペディキュアまで、照りつける日差しの中で輝いた。

清美は赤茶けた鉄パイプの梯子をのぼつて堤防の上にあがつた。潮風が顔にぶつかり、帽子が飛びそうになる。清美はそれを両手でおさえた。それでも、風に吹かれて飛んで行きそうになるほど、清美は風を孕んだ。

細波立つ河口の海にアジサシが次から次にダイヴィングを繰り返していた。アジサシが清美の頭上をかすめて夏草が一面に生い繁る埋立地の方へ飛んでいった。

清美は昔から河口の海の自然しさが好きであつた。埋立地は人が造つてないながら、それが一番人間から遠くにあるように思われた。生まれたばかりの土地は粗野で人間臭さがなかつた。

ただ海の色だけは自然とは違つて重く暗く濁んでいた明るいコバルトブルーの南シナ海、紺碧のインド洋、そして、サバンナの緑の海とは較ぶべくもない。

テトラボットの上で釣をしている若者が清美を見上げていた。清美が若者を見ると、若者は屈託のない笑顔を向けた。赤銅色をした半裸体は若く美しかった。しかし、それはやはり黄色人のものであった。黄色人の肌はいくら陽に焼いても深まりがなかつた。若者が何か呼びかけたようだが、よく聞こえなかつた。

庵になつて隠れていた堤防の棚の所から若い女が顔をのぞかせた。鼻がちよつと上に向いた可愛らしい二十才前の幼さだつた。少女は清美を警戒して険しい顔でにらみつけた。そしてすぐにまた影の部分に隠れた。

清美は同性から敵意をあびせかけられることには慣れていった。そんなことは自分には無関係だと思っていた。でも、それが三十才を過ぎると、逆に、親しみや優しさや好意をもつて接して来られることがあった。清美にはその方が苦痛だつた。女性の女性に対するやさしさには

どこか憐みの情が隠されていることがある。それが自分の何に向けられているものか分りすぎるほどに分つていた。

清美は白いサンダルを脱いで堤防の上に腰を下した。身体の芯までじっとりと熱さが伝わってきた。投げ出した足の下から粘っこい海の風が吹き上げてきた。

清美は太陽がいくらギラギラと照りつけても堪えなかつたが、湿気が肌にまとわりついでいつまでも消えないことにはうんざりだつた。これが日本の風土とはいえ、もっと別の透明な太陽の赫きと、乾いた熱い空気につつまれる甘さを知つた身体には、大いに苦痛であつた。

若者が竿を手繕り寄せた。竿は半月のよう撓つている。若者は諸肌脱いだ上半身を折るように前後にそらせながらリールを巻き上げる。テトラボットに打ち寄せる波の間に一筋の糸が滑るようにあらわれた。その先に銀



鱗を際立たせた獲物がついていた。若者は得意気に振り向いて笑った。若者の白い歯がまぶしく光った。

川の上流にある空港を飛び立ったジェットが機首をもたげて先の尖った槍のように厚い空気の層を貫いてどこまで真直に一直線のぼっていく。

清美は機影がきらめく光に融けて消えてしまうまで窓から空を見上げていた。

「才前ノ国へ行ク飛行機カモ知レナイ」

暗闇の中で男が言つた。ベッドの上の男の眼が闇の中で光っている。

「病院との契約がもうすぐ切れるから國に帰るわ」「日本カ……一度行キタカッタナ」

「決して住み易い所ではないわ」

「ケド、日本ノ国ハ日本人ノモノダロウ。ソレデ充分ジヤナイカ」

「そうだけど、好きになれないときがある」

「僕達ニハ自分ノ国ガナイノダ。白人ハ今デモ僕達ヲ支配シテイル。彼等ハ僕達ヲ未開ダトカ、乱レテイルトカ言ツテキタ。実ハ、ソンナコトハ嘘ナシ。彼等ノ理解ノ範囲ヲ越エテイタダケノコトダ。彼等ノ侵略ヲ正当化スルタメニハ、僕達ガ野蛮テアルコトガ条件ダツタ。ソレガ彼等ノ常套手段ナノダ。僕達ハ乱レテイル。ダカラ、いえすヲ信ジ、一夫一婦ノ生活ヲシナサイト教エタ。ケド、ソレモ西洋ノ論理ノ押シ付ケデシカナ。生産力ノ低イ部族ノ中テ、女性ガ子供ヲ生ムコトハ重要ナ生産ダツタ。ソレガ女性ノ仕事ダツタ。子供ハ生産力ダシ、女性ノ財産ナノダ。女性ハ子供ヲ持ツコトデ初メテ社会ノ一員トナルコトガデキル」

「私が三十才を過ぎても子供がないと言つたとき、あなたは信じられないと仕切りに頭を振つてゐたわね」「ソウダ。僕達ノ社会デハ信ジラレナイコトダ。僕達ノ社会デハ子供ノナイ女性ハイツマデタツモ幼名ガ消工ナイ。ソレハ一人前デハナイトイコトダ」

「私が沢山の男性から言い寄られたのも道理ね」

「ソレハ違ウ。才前ニ子供ガナイトイコトガ理解デキナカツタノダ。ソレガ僕達ノ論理ナノダ。あふりかニハ匂イガアルト言ツタあんそろぼるじすとガイタガ、僕達ノさばんなニハ匂イハナイ。さばんなニハさばんなノ論理ガアル。呪術ノヨウニ、部族社会ノ中ノ人間ニハ自明ノ理デアルコトガ、彼等ニハマルデ理解デキナイ。人間ヲ知ルニハ自然ヲ知ラナケレバナラナイ。ソレナノニ今ノ文明ハ自然ヲ破壊シテバカリイル。今ニキット自然ノ復讐ヲ受ケルコトニナル」

男は清美的勤務する病院で働いていた。そして、一ヶ月ほど前、清美が帰國の準備のためにダルエスサラームに滞在していたとき、ザンビアの奥地の戦闘で死んだ。

男が清美に残していくものは、民族愛と、黒く逞しい肉体、いつまでも陽に焼けない清美的身体が碎けてしまいそうなほど強烈に肉に喰い込んできた熱い逆りであった。

——ああ、と、清美は溜息とも悲鳴ともわからない叫びをあげた。

白い帽子が蝶のようひらめきながら落ちていく。堤防の斜面をすべり、風に吹き上げられて、舞うようにひらひらと飛んだ。そして、テトラポットの先の海に落ちた。

帽子は清美の心から剥れた一塊の想出であつた。それが不透明な草色をした海に漂う。

すると、釣をしていた若者が竿を手にしてテトラポットを順々に渡りながら白い帽子に近付いて行つた。

——待つていなよ。とつてやるから。

若者はそう清美に言つたようだつた。

——ケンジ、やめときなさいよ。
少女の棘々しい声が響いた。

——あぶないわ。

——だいじようぶだ。

少女の甲高い声に対し、若者のぐもつた声は、打ち寄せる波の音にも、風の音にも消されてしまう。

清美は白い帽子に寄つて二見ていた。

若者は軽やかにテトラボットの林を越えて清美のすぐ下までやつて來た。若者は自分の若さに得意だつた。

少女はぎこちなくゆづくりと細いコンクリートの棚を歩いてくる。ときどき憎々しげに清美を見上げた。少女は身重らしかつた。

若者はテトラボットの先の波間に漂つてゐる白い帽子のそばまで行つた。

若者はテトラボットの上の突起に片手をまわし、身体を海の方にのり出した。竿で水面を叩いた。しかし、河口の海は表面は穏やかでも、川の水と海水がぶつかり合つて、複雑な流れをつくつてゐる。白い帽子は流れ出しそうで流れずに浮かんでゐる。

と、小さく、

と、若者が叫んだ。

竿の先に帽子が引つかかつたときだつた。伸び切つた身体がそのままするすると水の中に落ちて行つた。

と、少女の悲鳴が重なつた。

一ケンジ、ケンジ。

少女が気が狂つたように若者の名前を呼んだ。テトラボットの間を不自由な身体で必死になつて若者が落ちた所まで行く。

若者はひからびた泥と藻がこびりついたテトラボットの突起の斜面に手をかけて水から這い上がろうとした。



しかし、手掛けたりもなく、急な傾斜になつてゐるため、再三ならず上がろうと試みたけれど、するするとすべり落ちるばかりだった。両手の指を大きく広げて斜面を掴むが、幾本もの筋跡が空しく残るだけであった。

若者はすべり落ちたたびごとにいたずらを見つけられた子供のようにはにかんだ笑いを見せた。

少女はようやくテトラボットの間をくぐり抜けて若者のところまでたどり着くことができた。

あんたのせいよ。あんたも下りて来て助けなさいよ。

少女は振り返つて清美に毒づいた。

清美は堤防の上に立ち上がつていた。白い帽子が落ちたとき、清美はそれを棄てたと思った。帽子をなくした髪が風になびいて白い服に纏わりつく。清美はすべてを棄てたと思つた。

少女が若者の出した竿を握つて引き上げる。若者がよろよろと斜面をのぼつてきた。少女は渾身の力を込める。若者は笑いながら油ですかり黒くなつた上半裸を水から出し、腰の辺りまで上がって來た。

そのとき、少女の身体がゆっくりとのめ摺り込むように落ちて行つた。若者も少女を抱きとめるようにしてそのまま水に落ちて行つた。

大きな水音がした。アジサシがぱつと四方に散つた。

少女は飛び立とうとして水面を蹴つて騒いでいるペリカンのようすに全身をばたばたさせてあはれた。そして、何度も水に沈んだ。若者は少女にしがみつかれて泳ごうにも泳ぐことが出来ず、二人はからまりながら浮き沈みを繰り返した。

二人は次第にテトラボットから離れて行つた。白い帽子は二人の先の水面に浮かんでゆつくりと流れ出した。二人は最後の力を出してひとしきり激しくもがいていたが、流れに抗することはできずますます沖に流され、ついには波間に消えてしまつた。

清美はだれもいなくなつた河口の海を見ていた。だれもいなくなつた。白い帽子が遠くの海にかすかに見えて

いたようだつたがそれも確かではない。白い大きな燕のようなアジサシが次々とダイヴィングをした。水漣吹きが対岸のテトラボットの近くや、川の中ほどや、あちらこちらで続いている。二人の男女を呑み込んだ不透明な草色の海は、相変らず細波立ち、陽光がはじけて、絶えずゆらゆらと揺れていた。

清美は堤防から下りた。清美の前から海が消えた。焼けつくコンクリートの白い壁と、まぶしく陽光をみなぎらせている真夏の空とそして、その空に鎌のようく銳く白いアジサシばかりが舞つてゐる。獲物をとつたアジサシが素晴らしいスピードで帆走し埋立地の方へ飛んで行く。太陽は少し西の山の方に傾いた。けれど依然として、烈しい真夏の陽光が河口の海に降り注ぐ。製鉄所の空に白い蒸気が昇つていく。

堤防の下の棚に脱ぎっぱなしになつた緑色のTシャツとクーラーとボットと蓋を開けたままの赤いバケットがある。編みかけのピンクのケープと毛糸玉がころがつてゐる。ゴムゾオリがはなればなれに引つくり返つたままになつてゐる。テトラボットの先に釣の道具箱が置いてあり、リンリンと風にゆれて竿の先の鈴が鳴つてゐる。アジサシが遠くで水音を立てた。赤いクーベが低い爆音をのこして堤防沿いの道を走つていく。（第一話完）



秋吉好さんは本年度ブルーメール賞文学部門（小説）の受賞者で寺西郁雄、谷原幸子両氏と共に同人誌「純」を舞台に意欲的な作品を発表している。最新号（第11号）では「ミュルメックスの変相」という演劇的な作品を発表、またもや新領域への斬り込みを計っている。作品のスタイルが屢々変るところから、いま自分たちのものを掘り切れないのではないかとの批評もあるがそれは秋吉さん自身を認めている。今回はオムニバス形式で各回完結で四回連載。こういう試みは以前にもやつたことがあるが「とても難しいですね……」が実感。十月号の原稿切りが「純」第12号の袖切りと重つたため目下大募集中だ。現在、大阪市教委社会教育第一課勤務。東灘区在住。

●北野町の坂道のほとりにある小さなサロン神戸時代。このサロンから新しい時代の波を●



プロフラメンコの本格派
宮田隆さんの発表初のコンサート



スペイン留学の成果発表会(7/28)



神戸時代のママからも花束が贈られて



藤原昭三作品展のオープニングパーティー(8/4)



細川 董 作品展

9 / 1 → 9 / 14

二科に入選し話題を舞いた細川先生のユニークな画風をお楽しみ下さい。



湯井一葉 ミニコンサート

9 / 26 PM7:00より



羽多悦子 作品展

9 / 16 → 9 / 30

神戸二紀の女流彫刻家
羽多悦子さんの空間を、
ご鑑賞ください。



宮田 隆 プロフラメンコの宵

9/7 ★ 9/21 PM7:00より

SALON & GALLERY

神戸時代

神戸市生田区中山手通1丁目28
モンシャトーコトブキビル1F
TEL. 078-242-3567

■日曜・祭日休

■営業時間 PM6→AM0 (ギャラリーはPM11:30まで)

連載小説

<4>

シール・ブラウンの神々

田靡 新

絵・松本 宏



「キミの作品を観ていると、やさしさが出てきたよ」

先輩格の松永が、ウイスキーのグラスを持ったまま、私の絵の前に立ちどまつた。白一色の雪景色である。キャンバスの目を残した白の世界は、雪と空の見境もつきにくい。その地平線上に杉林をキャンバスの左右いっぱいに細かく描きこんでいた。

松永は、樹木のようにひかっている防風林の遠景から顔をはなすと私にふりかえった。

「ふーん」

彼は、声にもならない溜息をもらす。私の絵を見入っていても、別に感動しているわけじゃないのだ。

私は恒例の五人展に雪をテーマにした二〇号の油絵を三点、展示していた。こどしの冬に北陸路の旅をして、仕上げたものである。この冬の旅に妻を伴い、温泉で雪見酒を愉しみ知人に紹介された民家の雪下ろしも兼ねたわけだが、妻との仲が決定的な破綻を迎えるというおまけまで付いてしまつたのだ。

「器用さがめだつて、テーマが失くなつたともいえるね」

松永は、三枚の雪景色を見放す

(VII)

かのように退すざりをする。彼のグラスには、液体がなくなり、氷が残っているだけだ。

「この前は静物じやなかつたのか。ランプとか、雁の死骸。その前は港……」

「和歌山の漁港です」

私は松永の記憶を助けるようにいいそえる。

「たしか、昔はピエロも描いていたよね」

私は、両手を前に組み、先生から意見を求められる生徒のように、松永の話を頷く。私のそんな姿勢を注視している眼を背後に感じたが、妻の杉野はまだ、どこにも姿を見せない。

「ところで、奥様はどうしましたか」

私は、彼の話に合せて再び会場内を見渡した。この絵の制作中に妻とは、別居同然になっていた。その噂を松永も知っている筈だ。しかし、五人展の初日ぐらいは、ちよつと顔をみせにくるかも知れない。私は画廊入口に客が入ってくるたびに注意をはらっていた。

「おそらく、こないでしようね」

「奥様は、焼きものを習いたいとか、いつていたのに、残念だな」

「気が多くて、かないません」

「若いうちだよ、キミ。何をやつても悔いを遺さずに愉しめるのは」

私は、これを機会に松永の側を離れ、若い仲間たちの方へ割りこんでいった。

「船田さん、インドに行くんですか」

ほんとか。いつだ。二年前まで勤めていた広告代理店のデザイナーたちに、私は囲まれる。

「知りあいの坊さんの誘いでね。主に仏跡めぐりだが、行くことに決めたんだ」

ひとりでか。奥様もいっしょか。私は質問に応えず喋つてゆく。

「のつけから欧州やアメリカとともに、おかしなもんでね。まずアジアからだと。日本のどろどろしたものの根源に

接したいと思つていた」

チャンス到来。若いデザイナーの羨しそうな眼が私を見ている。ドストエフスキイに凝つた若いころは、ナホトカからイルクーツク。そこからシベリア鉄道でヨーロッパ入りの旅を。それともインド洋を船の旅で。夢多き青春のときから、その考えは変わつていない。

「来年の五人展は、インド大陸の風景つてわけですか」

さきほど松永が、テーマがないといつて延長を彼らも見てしまっているということか。おもしろくないな。と私は口髭をなでながら照れるばかりだ。

仲間や知人たちは、ビールやウイスキーに冷酒の好きなものを飲み、つまみ類を腹におさめると引きあげていった。

「器用になつて、なんでも描くが、それだけじゃ駄目なんだね」

松永が、奥のテーブルで若い女性を相手に喋つているのが、聞えてくる。

「対象への切り込みが、甘いんだな」

女は、まじめな顔で松永の話を聞き入つている。

「例えば、この絵の手前の枯木スキ。ワシにいわせれば、こんな情景を描くよりは、雪の風紋を丁寧に仕上げた方が、この画面は生きてくると思うんだがね」

女は雪景色にふりかえつては、肩にたれる髪をすくいあげる。

細かい杉木立の遠景に対して、手前に枯木スキが五、六本積雪から首をもたげたまま折れている。私は黒っぽい針のような樹林の遠景も手前の枯木スキも神経質に、同じ熱心さで描きこんでいた。しかし、松永のいう雪の風紋は、私のテーマじゃない。私は、再び松永のテーブルに近づいてゆく。

「この絵の本人がやつきましたよ」

松永は、私を女性に紹介した。彼女は、松永に絵を習つてゐる生徒だという。

「雪の怕さや雪の龐大な重量感を知つた者には、雪は決

して美しくは描けないんですよ」

私は、若い女性に印象派風に描けないことを説明しはじめて、やめた。

真中の絵に眼を移す。二メートル五〇の積雪に埋まつた民家の一軒家。楓の防風樹は、母家の二階より高い。納屋や倉に囲まれた四方の庭にも雪は、深く積もつてた。

私の紹介されたその民家には、毎年やつてくる雪下ろしの人夫が泊っていた。妻は開炉裏のそばで、その人夫と冗談をかわしながら、雪の夜をいつまでも喋つていた。昼間も雪が降れば、屋根に上がれないし、積雪がなければ、積もるまで待つしかない。私は、雪のやむを待ちかね外へ出る。この樹木の城とでもいいたい構図のいちばん気に入つた位置を確かめるために、民家の周囲を歩きまわった。私は気に入つた地点が、見つかるまで雪の道を駆けていた。母家にふりかえり、人夫が大屋根に上がつていなければ、不安でたまらなかつた。脳裡を掠める怯えが、私の思惑通り、妻の杉野の駄に起つた。

私は妻の態度で、そのことが判つたが責める気はなかつた。むしろ歓迎しているほどだ。老人じみて、慘たらしいといわれようとも、妻がその気なら、私は密かに回春の手段のようと考えていた。

夜、ひとつの床で私は妻の乳房に耳を押しつけたまま眠つたふりをしていた。耳のなかを熱い脈搏が鳴り、そのたびに私の頭を少しずつ持ちあげる力を潜めているかのようだつた。それは妻の動悸ともちがつてゐる。まぎれもない私の血の流れだ。その脈搏は、直白な雪の世界を、こちらに向けて歩いてくる足音に重なる。深々と降り積もる雪の精なのか。

「飼い殺しと同じだわ。もう我慢できない。打つなら打つて。その方が思いきりがつくわ」

妻は鼻をつまらせたまま、私を詰つてゐる。私が妻の不倫を認めることによつて、ある種の拷問をかけていることに気づいていなかつた。

私は複数の方が、刺戟があつていいとは、口に出せないまま眠つたふりをつづけていた。あすは、屋根の雪下ろしを手伝うぞ。私はそう決心すると、翌朝、大きなスコップを持って屋根に上がつた。人夫は、きびしい顔でふりかえり身をかまえた。

「少し運動をしないとね」

若い人夫の躯からは、すでに汗の湯気がたちのぼつていた。

グレイオブグレイで塗りつぶした白の世界。私には雪は白く見えない。むらさきがかつた蒼い色。冷たい杉野の顔色に似ている。この雪の下に妻の熱い血がよどんでいるのだ。

(VII)

カルカツタから北部のパトナへは、わずか一時間の空路である。東洋と西洋のごつた煮、カルカツタの混沌と昂奮が、まださめやらない。

例えばインド人の肌色を思い出しても褐色から黒びかりの墨色までの色彩番号を色分けしても、とても伝えがたい。早い話が、同じ褐色でも全く明暗や調子が微妙にちがうのだ。音階の音色にも喻えてみたいのだが、それも適切ではなさそうだ。彼らの肌色を気づくままに挙げてみよう。

暗い琥珀色。赤銅色。黒鳶色。水に漏れた革色。雨に漏れた赤錆色。光沢のある黒、鳥の濡羽色。水の底の黒土、涅色。血染になつた色に、時間が経つて黒ずんできた血痕の色、朱殷。栗の表皮。干ぶどう色。橡色。紫檀色。マホガニー。駱駝色。獣虎色。蠍色。シール・ブラウン(あざらしの毛皮色)。中年のベニス色……。

ここまで考えをめぐらせるとき私は、ガキのころに口ずさんだ謎ときあそびを想い出して吹きだしてしまふ。こんな風に覚えているのだが。雪は冷たい／冷たいは氷／氷は割れる／割れるは西瓜／西瓜は赤い／赤いは



Hiroshi

腰巻／腰巻は臭い／臭いはオソソ……。

思わぬ脱線をしても、彼らの肌色は、印度の神々も言えないだろう。アメリカ・ニグロでもない。アフリカ土人ともちがう。ボリネシアの土着人とも同じでない。ましてインデオとも。

亞大陸と溶けあい膨らんだ闇は、そのまま水が低きに流れるように人々の影をなして、通りにあふれ移動してゆく。それが男ばかり。まさに黒い男根の放列に見えてくるのだ。これらのペニスを受け入れる女たちが、恐らく同じ数だけ建物や路上のものかけに、ひつそりと息をひそめているのだろう。

バトナの夕暮に買物にてた僧侶たちの一一行は、町の子供たちや大人たちに何重にもとり囲まれた。

「まるでお故郷入りのスターみたい」

川辺夫人の笑顔がつづかない。トンボ眼鏡をすらせては、しきりに汗を拭う。中央部の舗装道路にまでひろがった人の群れに、二八インチの大型自転車や輪タクが、はばまれるほどだ。

陽やけした背丈のない日本人が、ノッポのG.I.たちやバン助とのアベックを乗せ、腰をふりふりペタルをこいでいた風景が、眼前に重なってくる。そのG.I.たちを見あげるよう、チョコレートや煙草キンキンをねだつた兄たちと駆けずりまわった私が、いまバトナの町にきている。

ターバンを卷いた奴、剣をおびたきつい眼の男、五分刈に一房の長い髪を後頭部に残している丸顔など、様々の服装と容貌の男たちが、サドルにまたがつたまま、われわれの一行を眺めている。

「チャイニーズ」の声も聞こえる。私は子供たちに囲まれ、英語のスペルを紙片に書きつけて話しかける。少年は十二歳という。私の子供より軽がひとまわり小さい。漆黒の髪、大きな瞳、女の子と見紛うほどのきれいな睫毛。怜俐そうな顔立ちとあいまつた軽全体が、いつそう端整に見える。瓜ふたつの弟は、まるで人形のおもかげさえ漂わせる。

添乗員の野中と私は、間口が一間ほどの店先に陣どつて子供たちと話しこむ。学校で英語を習っているらしく、大人たちよりは話が通じる。笑つても、ほとんど声をたてない。白皙い歯が、朽葉色の顔に白い花を咲かせる。それが、またなんともいえない清楚な感じなのだが。むし歯がない。ネムの粗朶で歯を磨くという。われわれが爪楊枝を使うのに似ている。それに子供たちは、汗をかかない。水分をできるだけ摂らないようしているからだと野中が、説明してくれる。そういうえば、大人たちの汗を拭くのを見たが、腰巻の前に垂れた布地で、さつと顔や口を拭う。横着者の私が、シャツの袖でやると同じことだが。

私は少年の兄弟にカメラを向けたお礼にと、日本の幼児が胸にぶらさげる交通安全を描いたハンカチーフを余分に持ってきていたから、そつと彼に握らせた。インドの子供にハンカチーフは、いらなかつた。

私は、炎暑とごみしたばかりに疲れていた。暑さだけでなく、わけの判らない怯えのためにも、とめどもなく汗を流していた。それは、近くのバトナ駅へよいよ汽車が到着して絶頂に達した。勤め帰りの大人们の群れが、地面から湧き出るように道路をふさいでゆく。私は群衆にふりかえり、汗を払う。駅舎の向うに、ちょうど大きな夕陽が沈みかけている。私はしばらく燃えおさめの太陽を眺め、眼が眩むまでいた。その夕陽の手前は、逆光線になつていて、群衆の暗い蠢きが、あたかも砂漠に立つてゐる砂ぼこりを見るおもいだ。日本の大都会のラッシュともちがう。裸像の生なましい雰囲の海川辺が、日本人の旅の心をいつてのけた。(つづく)

が、熱い帶状にひろがり、とぎれることがないのだ。

一見このおぞましい群衆を受け入れる広い亞大陸があつて、熱地のために、何もしなくて汗で汚れてゆく毎日がある。そんな暮し向きが変りそらもないカーストや宗教が入り乱れていて、貧しさと空腹が、永遠につづくのなら、いつたいどんな神々が坐しますのやら。

——おお神様。私はふざけているわけでもないのに、考えがまとまらず、茫然と立ちつくしていた。

「子供たちにメロディがないんだね」

夕陽が沈むとあたりに暗さが、ひときわ早く暮れなずんでくる。日本の子供の歌を聞かせていた広告マンは、インドの子供たちの歌声が録音できないことを零していれる。

「よく笑うのだが、まるで声を出さないこともよんだけね」

「腹がへつていて、歌どころではないということか」

私は、どうしても焼け跡のイメージと結びつけてしまう。陽が昇れば、頭の上に籠皿を乗せ、牛糞燃料といわれる燃料を集めでる少年は、その仕事をつづけるだろう。朝のバサールには、歯磨きにもなるネムの粗朶を十数本、地面に並べている少年。売れても売れなくとも膝をかかえてじっと坐つてゐる子供がいる。

ナーランダやブッダガヤの仏跡めぐりのルートに群つてくる子供たちは、菩提樹の葉脈や白檀の数珠を売りつける。ネパールのヒマラヤ見物に行ったときは、草刈り籠を背負つた少女らが、モデルになりたがつた。雪をかむつたヒマラヤの峰々を背景にカメラにおさまることでワントリーピーをせがんだ。学校の始業時間までに草刈りをするのだといふ。

「日本人ばかりに物を売りつけるね」

「施しの心が、入りまじるせいじやないのかな」

「なんば、子供たちがうるさくても、いつさいふりむきもしない毛紅たちの旅の仕方だけはやりたくないね」

川辺が、日本人の旅の心をいつてのけた。(つづく)